

している。ただいくらか演劇的な演出法で主要人物に焦点をおきすぎたため、サバタと民衆とのつながりが説明不十分で終ったうらみがある。マローン・ブランドは好演。まるで無字だが考え深く、粗野ながら心根はやさしい自己犠牲の姿を彫刻にしてみた。これは勝利者の哀愁を面にしたたえたミケルアンジェロのダビデ像を連想させる。特にすべての面で、サバタが大統領になるまでの前半がすばらしい。

*一九五二―五三年にわたって「週刊サンケイ」に「スクリーン レーダー」のタイトルで長期連載されたもの。つづけて全編を発表順に分載の予定。詳細は小誌第七号（二〇一四年夏号）所収の森弘太「佐々木基一の映画時評・覚え書」を参照されたい。

佐々木基一の私小説について 勝又浩

こんど佐々木基一の小説を集中して読んで、これらの作品がおおむね見事な、また典型的な私小説である事実には、私はまず驚いた。『停れる時の合間に』――発表当時ブルースト張りの小説だとも言われた――の印象が強かった私は、これまで佐々木基一は私小説を書く人という認識を持たなかったが、事実はむしろ逆、私小説作品を基本とした人が例外的に長編ロマンにも挑んでいたのだと考えた方が正しいだろうと思っただけだ。『鎮魂』――小説阿佐ヶ谷六丁目（昭和55年）などは私小説のスタイルを採ることによって、結果的に反って時代のよい証言にもなっていると言っただけであろう。

その考えると、大きく言えば日本の近代文学のなかでの私小説というもの、その意義や役割や潜在的な力といったことをもっともって考えなければいけないと、そういう思いをいつそう強くしたのである。もとより私小説についての議論はこれまでもたくさんあるが、それは、言うならば私小説という存在の、その水山のほんの上つ面を撫でているに過ぎない。私小説には、今もって人々が気づかず、認識していない大きな、深い水面下の世界がある。少し強調して言えば、佐々木基一までがこんなに見事な私小説作者であったという、私にとつては驚きの、認識を改めた事実が、そんな思いを誘ったのである。

私事になるが、私どものやっている「私小説研究会」では一昨年、「コレクシヨン 私小説の冒険」（勉誠出版）なる叢書を刊行した。さまざまな事情から現在は『貧者の誇り』（平成25年10月）と『虚実の戯れ』（同11月）の二冊しか刊行できていないが、初めは全二七巻の計画だった。実行段階で取りあえず八巻を、というところになってしまったが、既に予告した巻名をあげてみると、前記二巻の他に次のようなものがある。『青春の疾走』『老いの苦楽』『家族、光と影』『敗戦とアメリカ』『描かれた作家たち』『狂気の淵』などである。これらの例からもお分かりいただけると思うが、この「コレクシヨン」は私小説を年代順でも作家別でもなく、テーマ別に分類、編集したところがこれまでにない特色である。言い換えると、私小説が人間や人生、そして文学自体の問題にいかにも多様多角的に取り組み、切り込み、また探求してきたかという事実を見てもらう、楽しんでもらうという計画、つまり「私小説の冒険」というわけである。

ところで最近のこんな仕事をまだ頭のなかに引きずっている私は、佐々木私小説を読みながらもずっとそんな連想のなかにいた。たとえば、著者のウィーン滞在中の小旅行での見聞であるらしい『異国調』（昭和49年）などは、名付ければ「軍中小説」である。古いところでは志賀直哉『網走まで』（明治43年）や、芥川龍之介『蜜柑』（大正8年）などは教科書的作品だから知る人も多いであろう。その戦後の展開として、復員列車や網棚にまで人を乗せた超満員列車の光景である小島信夫『汽車の中』（昭和21年）や梅崎春生『生活』（昭和24年）など、あげて行けばたくさんある。『異国調』も、だからそうしたなかに置いてみれば、軍中小説外国編として、これはこれとして確実に一つの時代を映しているのである。

ついでに言っておけば、私小説は社会性に欠けるとよく言われるが、決してそんなことはないことが、こんなふうに同じテーマを持つ作品を並べてみることによっても明瞭になる。ヘタな思想小説などよりよほど明らかに、正直に、作者自身の立っている場所が現れてしまうのが私小説だからだ。小さな社会性が見えない作品にも大きな時代性は必ず映っているのだ。

が複雑化し、それにしたがって表現も錯綜してきていることが明瞭になるだろう。この小説では「H市」と記されている広島市は佐々木基一自身が旧制中学校に通う五年間を過ごした街であった。親しかった同級生や実の兄妹も住んでいたところだし、中学の先輩であり、後に義兄となった原民喜の故郷でもあった。義兄であるとはつまり親戚になったということだが、そのため「わたし」は原民喜の次兄の家を訪ねたり一緒に墓参りもしている。

しかし一方、この街は世界に知られた特異な歴史のゆえに街の姿は一変し、戦後は政治運動の象徴的な「トポス」ともなった。そのため戦後にはそこを訪ねることがその人の思想まで問われるような時代まであったのだが、「わたし」はその歴史にも、その内部から立ち会わねばならなかった。彼にとって広島は単純に往時を懐かしむことの許されない、いや、「自分では隔々までも知っていると思う土地」であるために、行ってみれば反って、それがごとごとく毀され消されたということの確認を迫られるところとなってしまう。「わたし」にとって広島は、広島であって広島ではないわけだが、「ひよっとしたら、そのことを確認するために、わたしはこの街にやってきたのかもしれない」ということになる。

佐々木基一にとって広島は、いわばたくさんの引き出しがあり過ぎた土地でもあるのだろう。この『まだ見ぬ街』などは個人的な時間と歴史的社会的な時間と

が濃密に重なって純度の高い結晶をつくりあげていると思われたが、同じ広島再訪でも『秋の旅』（昭和51年）は、うっかりガラクタの詰まった引き出しを開けてしまった例だったかもしれない。こちらはだいたい脳血栓で倒れた旧友を見舞うのが目的だから、話はいきおい個人的な時間のなかに終始せざるを得ないが、私に気がなったのは、この再訪に一人の女性を伴っていることだった。「O女」と呼ばれるその女性は最近まで小料理屋をやっていたとされ、かねて彼女が瀬戸内海を見たいと言っていたので同行することになったという。しかし折角二人で旅行し、同じ部屋に泊まりながら男と女の関係にはならなかったのだとされている。それはそれとしていかにもインテリらしい話だと言ってもよいのだが、一方、作品の結末では、「O女の胸にしがみつきたい衝動を覚えた」、「O女の前身を投げだし、O女の足にとりすがって哀願したい欲求」などという青い甘やかな激情も書かれていて、そのギャップが私には理解できない。

「病気見舞いのための旅でなければ、もつとよかつたのに」
(中略)
「それは、お次ぎの楽しみにとおきましよう。でも、こんどのようにNさんの病気見舞いか何かでなければ、先生からお誘いがかかることなど絶対ないでしょうね」
「どうして？」

「そういう方ですもの、先生は」
図星だ！ この女はオレという人間をよく知っている！

佐々木基一全集 全10巻
河出書房新社刊

I 初期作品 / II 文学・芸術 / III 時代と状況
IV 作家論・作品論① / V 作家論・作品論②
VI エッセイ・俳諧 / VII 新編・映像論
VIII 短編小説ほか / IX 小説『停れる時の合間に』
X 佐々木基一研究・補遺

★定価 各巻三三〇〇円（本体価格）

この小説が「文藝」に発表されたとき、私はここを読んでいささか呆れ、小説家としての佐々木基一に失望したことを、今度は全集版で読みながら突然思い出した。この小説を発表したとき作者は六二歳だったが、私には四〇年前も今もまったく理解できない自意識のありようである。

故地再訪に同行者があるのは、先に触れた梅崎春生「幻化」にも見られる一つのパターンだが、『幻化』の場合は、その同行者が同時に対立者であり、道化役であり主人公の分身でもあるという重層した役割を担って見事だった。いま「幻化」と並べるのなどは『秋の旅』の犬樺になるかもしれないが、それにしても、故地再訪小説としても恋愛小説としても中途半端なのが難点である。

ところで、この話の舞台「H市」も言うまでもなく広島市である。二人は「名物」の牡蠣料理を楽しんでいるし、何よりO女は市内遊覧バスに乗って「原爆記念館」を見物している。ついでに言うところ「O女」のことは別の作品『交歓』（昭和50年）にもちよつと出て来るが、見舞った級友「N」のことは『断崖病』（昭和50年）『交歓』と続いて書かれている。それらを知る読者には、だから「N」は「わたし」とは中学以来の同級生であり、高等学校ではともにサッカーをやった仲間、京大卒業後は建設会社に勤め、その社長の娘と結婚したが後に離婚することになった等々、自ずから別作品での情報も重なってしまうことになる。これほどの人物を「N」のまま通しているのが佐々木小説の一貫した表記法である。しかしローマ字記号では人物の顔立ちさえ浮かびにくい。

先の『まだ見ぬ街』で言えば、ここでも原爆資料館まで記しておきながら「H

市」で通している。あるいは、「わたしには義兄」だと書きながら、また代表作『夏の花』からの引用まであるのに、原民喜はずっと「T・H」のままである。原民喜や「詩人S・T」と記される峠三吉などはこの時点で既に歴史上の人物でもあるのだから、実名であっても少しも支障はなかったと思われる。それをあえて、あるいは頑固にイニシアル記号にしている作者の意図が私にはわからない。藤枝静男なら——私小説作者として極めてラジカルだった藤枝静男ならば、すべて無駄なこと、意味のないことだと言ったのではないだろうか。

そして、そんな連想から逆照射するように想像してみれば、佐々木基一は自身の小説を、世のいわゆる私小説とは一緒にしたくなかったのだからと思うほかない。「わたし」とは書いていても、それ

は作者個人を言うのではないのだ、と。しかし、言うならばそのあたりが私小説作者としては定まりきらないところ、中途半端なところではないだろうか。そして、そうした私小説作者としての覚悟の足りないところが、先に『秋の旅』で見つたような自意識の甘さにもなっているのに違いない。だが、そこでもう一ついえば、思うにこれらは、私小説というものをまっとうには突き詰めてみるものなかつた彼らの世代の不幸——「戦後は、われわれもそうでしたけれども、とにかく私小説をやつければ評論が書ける」、「私小説を非難し、自然主義リアリズムをやつつけるところから出発した」（『私小説・心境小説』佐々木基一全集第二巻所収）と、こんな世代のもつた弱点、不幸だったように思う。

（かつまた・ひろし 文芸評論家）